

2026年1月17日

酒とご飯と健康とー《酒飯論絵巻》を手がかりに

京都工芸繊維大学美術工芸資料館特定教授 並木誠士

概要

室町時代後期16世紀前半に制作された《酒飯論絵巻》は、狩野派という絵師の流派の2代目狩野元信(1477-1559)が描いた絵巻で、お酒好きとご飯好きそして両者をほどほどに好むという三人が、それぞれに持論を展開するという大変魅力的な内容です。しかし、その背景には、この時期に京都を中心に蠢いていた宗教論争を隠されています。きょうは、その更に裏側にある当時の人びとの思いにも焦点を当ててみたいと思っています。そこには、酒飲みを非難するような考え方が見え隠れしています。

そして、この《酒飯論絵巻》の特徴のひとつは、制作当時の人びとの日常生活の様子が生き生きと描かれていることです。それは、室町時代末から流行することになる「風俗画」の源流とも考えられます。そして、じつは、その点こそが「病」と捉えられていたのです。酒飯の論争とともに、日本絵画史のなかで「病」とされた絵画をじっくりと鑑賞していただきたいと思います。

次第

- 《酒飯論絵巻》とは？
- 《酒飯論絵巻》の絵と詞
- 酒好きに対するコメント
- 《酒飯論絵巻》と狩野元信

登場人物

- 酒好き 造酒正糟屋朝臣長持
- ご飯好き 飯室律師好飯
- 両者ほどほど 中左衛門大夫中原仲成

絵巻の構成

- 1巻4段
- 第1段 3人の登場人物の紹介
- 第2段 造酒正糟屋朝臣長持の屋敷の様子
- 第3段 飯室律師好飯の僧坊の様子
- 第4段 中左衛門大夫中原仲成の屋敷の様子



三人の登場人物（右から、造酒正糟屋朝臣長持、中左衛門大夫中原仲成、飯室律師好飯）

《酒飯論絵巻》の背景

- 宗教的背景 → 庶民宗教（念仏宗、法華宗）の台頭と天台宗の巻き返し
16世紀前半
- 15世紀末の床の間の成立と普及 → 部屋飾（室礼）の充実
- 茶道の流行 15世紀後半～ → 「茶酒論」（中国、敦煌写本 10世紀後半）の影響？
- 小袖文様の多様化 → 16世紀前半から顕著になる
→ 風俗画の成立

狩野元信（1477-1559）

狩野派の初代正信の長男。応仁の乱以降の混乱のなかで、公武・僧俗のパトロンからの仕事を受けて、流派として明治時代まで続く狩野派の基礎を築いた。江戸時代初期の画論『本朝画史』（狩野永納編）には、元信が「彩墨尽其美、和漢得其宜」で「天下画工之長」になったと記される。代表作に、大徳寺大仙院襖絵、四季花鳥図屏風（白鶴美術館）、釈迦堂縁起（清涼寺）、酒呑童子絵巻（サントリー美術館）などがある。

中林竹洞（1776-1853）

江戸時代後期の文人画家。名古屋の生まれで名古屋で絵画活動をはじめが、享和2年（1802）には京都に出て、京都を基盤に多くの文人との交流を深める。古書画の研究を積極的におこなう。早くから理論家として知られ、幕末期には文人画の理論的指導者となった。代表的な著書に『画道金剛杵』（1802）『竹洞画論』（1802）などがある。